

平成24年度 東京都高等学校陸上競技対校選手権大会のみどころ（男子編）

昨年のインターハイでは、東京都の男子は3種目優勝し、入賞数は延べ10種目となり都道府県別では全国6位と健闘しました。秋の関東新人では女子の活躍が目覚ましく優勝はじめ上位入賞が多数になりました。

今年度の新潟インターハイを目指して、今大会が南関東大会（6月15日～18日前橋市）への出場権を争う大切な大会となります。今年の東京都高校総体は男女ともハイレベルな激戦が予想されます。昨年度の50傑表と今年度のこれまでの大会結果から南関東大会出場を目指す本大会の展望をお楽しみください。

（南関東大会には、東京都から各種目6名、競歩・混成競技は4名が出場します）

・短距離

100mでは、昨年度新人大会優勝者 加藤 勇司（東京3）、関東新人大会4位の松本 裕也（岩倉3）を中心に展開されると思われる。ただ、今年の短距離は混戦模様だ。200mで昨年インターハイ出場の金戸 正太郎（保善3）、徳岡 隆之介（八王子3）の実績も光る。しかし、関東新人200mで4位に入賞した丸池 優太（昭和第一3）が今季好調で400mと共に優勝する確率が最も高い選手と言える。彼らを追うのは、玉井 柊也（日大豊山3）、吉田 貴一（暁星3）、林 謙太郎（八王子3）あたりだろう。

400mでは、丸池が東京選手権で48秒42をマークし優位である。200mでのスピードを武器に47秒台前半を出せる力がある。それを、昨年のインターハイで47秒台をマークした三武 潤（城西大城西3）、白石 浩之（立教池袋3）の800m組と400mHの田辺 将大良（東京3）が挑むレース展開が予想される。47秒台でのレースを期待したい。竹内 拓郎（日体荏原3）、清水 勇也（東京3）にも十分チャンスがある。

短距離のレベルが高い南関東大会では激戦が予想されるだけに、今大会で勢いをつけておきたいところだ。

・中長距離

今年の東京都男子800mは、「史上最強」と言える。昨年世界ユース大会に出場した後のインターハイでケガをし、新人大会をやむなく欠場した三武 潤（城西大城西3）は1'51"43の自己ベストを持ち、実力・実績共に全国優勝候補の筆頭である。三武に対し、昨年新人大会に優勝し、3月末の全国高体連合宿で研鑽を積むなどこの冬季練習を積極的に過ごした中村 拓哉（都町田3）は1'52"86の記録を保持している。しかし、4月初旬に故障しており回復具合が心配される。また、昨年度1'53"36をマークした白石 浩之（立教池袋3）は、昨年のアジア・インターシティで優勝を果たすなど経験も重ねており、400mのスピードにも長けている。混戦になると抜け出す力は十分にある。この3名はインターハイでも優勝候補に名を連ねる事だろう。更には戸澤 文也（城西大城西2）は昨年1年生ながら1'54"96を記録している。こんなにレベルの高い800mは大会史上初であろう。この4名が中心となってレースが展開されることは間違いないだろうが、今季は5月4日和歌山グランプリで三武が1'52"03をマークし、これまでの実績とスピード能力の優位さから一步リードしているといえる。20日の決勝では牽制せずに全員が引っ張り合い全国NO1のレースを展開し、東京都高校記録1'49"81の更新を期待したい。

1500mは昨年のインターハイ2位の打越 雄允（久我山3）が3'47"48の東京都高校記録を持ち傑出しているが、冬場の故障から回復が思わしくない。4月22日の兵庫カーニバルでは4'02"24と今季はまだ本来の走りができていない。しかし、能力は高いだけに大会初日に合わせ先頭に絡んでくるのは間違いない。打越に劣らないのが武田 凜太郎（早実3）である。3'52"22のベストを持ち、5000mでの走力もずば抜けているだけに、打越の回復次第では武田が優勝候補だろう。同じく昨年インターハイに出場している菊池 聡之（岩倉3）が先頭を引っ張るレースが予想される。東京選手権では社会人選手に引けを取らない走りで常に3分台で走る安定感は群を抜いている。また、牽制しあう展開となれば下田 晃大・阿部 怜央・中山 将の東京実業トリオにも上位進出のチャンス

があるだろう。

5000mでは、実力的には武田と打越の争いになると予想されるが、昨年のベストでは武田14'16"41に対して打越14'32"29。更に武田は今季すでに14'18"50をマークして好調なだけに優位である。また、一月に広島で行われた全国都道府県男子駅伝で武田は、高校生区間の第一区で第4位となり東京都チームの準優勝に大きく貢献した実績を持つ。全国的にも上位にランクされる武田のインターハイでの活躍も楽しみである。また、稲毛 悠太（東京実業3）、菊池 聡之（岩倉3）、秋山 清仁（順天3）も14分台前半で走ることができる力があり楽しみである。昨年に引き続きこの種目も確実にレベルアップしている。

3000mSCは昨年新人大会で優勝した千島和希（大東一3）が実力的に一歩リードと言える。走力・ハードリングともに他を上回る能力を備えているだけに優勝に最も近い存在だ。千島と競り合うとすれば、新島 英虎・荒木 数也の久我山コンビと新堀 遼・萩原 祐樹の東京実業コンビだろう。また、西谷 泰介（麻布3）も走力があるだけに上位入賞を争うだろう。

・ハードル

110mHは、昨年度まで全国屈指のハイレベルで5名がインターハイに出場した。昨年の本大会を思うと今年はやや見劣りするが、ひと冬で成長した選手が多い。唯一14秒台をマークしているのは八種競技専門の栗原 彰理（都東大和3）だ。関東新人でも入賞しているだけに経験値も高く勝負強いことから優勝候補の一番手と言える。栗原と争うと見られるのは昨年の山口国体に少年B110mJH5位入賞の坂本 景と前田 洋志の東京高校2年生コンビだろう。両者とも向い風1.9mのなか14秒台に迫るタイムを出しているので、この3名で優勝を争う様相だ。「ハードルの東京都」の後継者となるのはだれだろうか？

400mHは、実力NO1の田辺 将大良（東京3）が自己記録を52"75に伸ばし「今年こそ…」と大会記録更新を目指している。昨年は鎖骨を骨折し涙をのんだが今年は復活しそうだ。その田辺を追いかけてそうなのが高山 和城（郁文館3）・加来 宗一郎（都国立3）であるが、東京高校の大串 卓也

にも53秒台の力が備わってきたので上位争いに顔を出しそうだ。そのためには前半からの積極的な走りが必要とされるだろう。

・競歩

5000m競歩は今年も東京実業の選手が上位を独占しそうだ。この種目を専門としている児島先生が指導者としているだけにそれも頷ける。その中でも小関 世騎（3年）は4月8日の強化競技会で21'38"09という昨年の全国ランク12位に相当する好記録をマークしている。おそらくインターハイでも入賞に絡むだろう。また、風間 渉（3年）も22分台の記録を持っており全国入賞を目標にしているだけに小関からは引き離されたくはないだろう。毎年参加数が寂しいが、今年は出場者も16名に増え着実に普及しているといえる。

・跳躍

走高跳では、昨年日本ユース3位の実績を持ち2m04の記録を持つ先崎 航（都つばさ総合3）の優勝の確率は非常に高そうだ。しかし、先崎がもたつくようなら勝負強い松鶴 竜次郎（都武蔵野北3）にもチャンスがある。しかし、例年よりも1m90以上の記録を持つ選手が少ないことから入賞ラインは1m88cmになる可能性もあると予想される。奮起を促したい種目でもある。がんばろう！

棒高跳も競歩同様出場選手が増えた。強化・普及活動の成果が現れたのか？と実感する。そこで、優勝記録の向上にも期待をかけたい。優勝に近いのは渡邊 淳之（都日比谷2）、秋山 優（都竹早2）、奥平 拓海（桐朋2）の3名で横一線の力を持つが、是非とも4m50以上にバーをかけてほしい。大石 悠（明中八王子3）とルーキー田代 丈（東京1）にも4m50以上を目指して競い合ってもらいたい。

走幅跳は、昨年の山口国体少年男子Bで4位に入賞した内川 佳祐（東京2）が7m17の自己記録をもち、各大会にも確実に7m以上の記録をマークする安定感を持っている。内川はこの冬で基礎体力が備わり走力向上に繋がり断然スピードが増した。7m30を超える可能性も非常に高いだけに期待したい。また、千葉県からの新入生間中 太亮（日大豊山1）も6m80以上をコンスタントに跳び、1000mのスピードも10秒台であることから大ジャ

ンプの可能性もあり楽しみである。間中以外にも優秀な1年生が多く入賞に絡んできそう。また、昨年までの実績から前田 淳（早実2）と竹内 克之（都文京3）にも上位入賞の可能性はある。

三段跳では、今季成長目覚ましい佐々木 恭平（都青梅総合3）が14m64と昨年から50cm以上自己記録を伸ばしてきた。佐々木はスピードもあり能力も高い事から更なる記録向上が望める。佐々木に対するのは関東新人3位の石川 颯（東京3）と鎌田 稔生（東亜学園3）で、是非とも3名の中から15mに迫るジャンプを期待したい。各支部とも13mを超える選手が増え、予選通過記録も13m30と上がった。

・投擲

砲丸投・円盤投とも第一人者の幸田 和記（東京3）の優勝は確実だろう。砲丸では16mのラインを超える可能性も高く、昨年の鈴木 愛勇に続き全国優勝を期待したい。円盤では、3月の全国合宿で指導を受けコツをつかんだ様子だ。今年は2種目でインターハイでの活躍が期待される。幸田に続くのは、砲丸ではルーキーの安藤 夢（東京1）だろう。

安藤は昨年の中4位の実績を持ち東京高校に入学。6kg砲丸での初めての試合で14m68を投げ、支部予選では15m07にまで伸ばしている。将来性の非常に高い選手である。

円盤では荒川 涼太（都武蔵野北3）が今季40mを超えており幸田を追う一番手であろう。吉住雄大（日本学園3）山勝 将也（都交北）にも優勝のチャンスがあるだろう。

ハンマー投では、小林 祐貴（成城3）が唯一50mを超える記録を保持しており昨年の新人大会も制しているだけに優勝はほぼ確実だろう。後藤 裕矢（都足立東3）北詰 修三（日体荏原2）も50m突破を目指しており3人の勝負となると思われる。この種目は5月13日（日）大井競技場で行われる。

やり投げは、今季支部春季で61mを超えている板橋 悠人（穎明館3）が傑出している。小柄ながらパンチ力があり各大会で入賞しているが、都大会以上ではまだ優勝していないので悲願を成就したいところだろう。板橋に迫るのは、昨年までのベストを見ると山下 大輔（東大付3）角田 直之（日体荏原3）、支部予選での記録では堀口 涼太（東京実

業3）で、其々に60mを超える力があるだけに19日に調子の良い者にチャンスは広がるだろう

・混成競技

この種目では、本大会昨年2位の栗原 彰理（都東大和3）が其々の種目で自己記録を伸ばしていることから全国出場に手が届く得点を獲得し優勝する可能性が高い。特にハードル・高跳びの得意種目で確実に加点することがその条件だろう。栗原を追うのは、宮川 智也・右代 啓欣・間宮 祐輔の東京トリオかと思うが栗原が大きなミスをしない限り追いつくことは難しいだろう。だが、南関東出場を目指して最後の1500mまで目が離せない展開となりそうだ。

・リレー

4×100mリレーでは、昨年インターハイで優勝した東京が支部予選でバトンミスから落選し一気に混戦の様相を呈してきた。今季のこれまでをみると、支部予選で41秒99をマークした八王子が頭一つ抜け出した。元々走力のある選手がいるだけにまだまだ記録をアップさせるだろう。また、日大豊山には有望な新入生が加入したので戦力は確実にアップしている。堀越・桐朋にも上位に入る可能性があり、「バトンパス」に注目したい。

4×400mリレーでも八王子が優位だろう。昨年インターハイの準決勝を経験した1・2年生が多く、徳岡・大澤を中心にバランスの良いチームができた。東京も昨年の新チームで3分16秒台をだしているのも侮れない。両チームの競り合いの間隙を縫い、800mの三武を擁する城西大、バランスのいい布陣の早大学院にも優勝のチャンスがある。互いに競り合い3分15秒を切ることを期待しよう。